

中国語を母語とする上級日本語学習者は 日本語のヴォイスをどのように表すか

—受身表現, ナル, テモラウから分かること—

植松容子

1. 研究の目的

文法カテゴリーにおけるヴォイスとは、能動と受動、能動と使役を指し示すことが一般的であるが、日本語のヴォイスを議論する際には受動（受身）、使役のみならず、自他やテモラウ等も視点が関与する点においてヴォイスの1つとして捉えられることが多い。これらのヴォイス表現は、日本語教育においては初級の後半で学習するのが一般的である。しかし、上級レベルの日本語学習者にとっても適切に運用するのが難しい項目である。その要因の1つとして、ヴォイス表現は1つの場面であっても、「そこで何を伝えたいのか」によって選ぶ視点や表現が変わるため、正解は1つではないことがあげられる。しかし、特定の状況下においては、日本語母語話者におけるある程度の選択傾向があるのも確かである。本稿では、中国語を母語とする上級の日本語学習者における日本語のヴォイス表現の使用状況（正用・誤用・非用）を広く観察して日本語母語話者の使用状況と比較することにより、上級になっても残るヴォイス表現運用の困難点を明らかにすることを目的とする。

2. 先行研究と問題の所在

2.1 中国語母語話者における日本語のヴォイスに関する先行研究

これまでの研究において、中国語母語話者における日本語のヴォイス表現の問題を扱ったものは多く見られる。これらを研究方法の違いから概観すると、①対象とするヴォイス表現の数、②正用・誤用・非用のいずれを扱うか、③日本語母語話者との比較の有無、の3つの観点から整理することができる。

例えば渡邊（1995）ではストーリーテリングの手法で収集したデータを対象に、調査対象項目は1つ（受身）、分析対象は正用と誤用であり、日本語母語話者にも同様のタスクを実施して比較を行っている。胡（2016）も LARP at SCU（東呉大学コーパス）を対象に1つの項目（使役）のみを調査しているが、正用と誤用に加えて非用も分析対象としており、日本語母語話者との比較は行っていない点で渡邊（1995）と異なる。

一方、複数の項目を対象としたものには望月（2009）があり、誤用パターン別上級日本語学習者作文コーパスを対象に、自動詞、他動詞、受身、使役、可能の5項目を調査している¹。分析対象は誤用のみであり、日本語母語話者との比較は行っていない。杉村（2013）も自動詞、他動詞、受身と複

1 誤用パターン別上級日本語学習者作文コーパスとは、平成19年度～22年度科学研究費補助金助成基盤研究A「多言語話しことばコーパスと学習者言語コーパスに基づく言語運用の研究と教育への応用」（研究代表者川口裕司、科研費No. 19202015）の助成を受けて作成されたものである。

数の項目を扱っており、独自に作成した用法分類に基づく選択式アンケートの結果をもとに正用と誤用を分析対象とし、同じタスクを日本語母語話者にも実施した上で比較を行っている。

2.2 問題の所在

このように、先行研究において、中国語を母語とする日本語学習者における日本語のヴォイス表現の問題が取り上げられたものは多いが、上級になっても残るヴォイス表現運用の困難点を明らかにするには、次の3点に留意して調査を行う必要があると考える。

1点目は、1項目だけでなく、複数のヴォイス表現を取り上げることである。ヴォイス表現は相互にかかわりあうものであるため、複数の項目を同時に観察することが有効であるが、複数の項目を扱ったものは多くない。

2点目は、中国語母語話者と日本語母語話者に同一課題を実施したデータを使用することである。ヴォイス表現の選択は、視点の置き方にかかわるため、誤用か否かの判断が難しい場合がある。したがって、日本語母語話者と比較可能なデータ（同じ条件下で産出されたデータ）を対象にすることにより、中国語母語話者はどのような場合に不自然な表現を選びやすいのかを判断する際の有効な材料となる。

3点目は、調査の際はヴォイスの観察に適した課題設定をする、あるいは適切な課題設定により産出されたデータを使用することである。例えば、「将来の夢」という課題設定では、書き手を主体として書くことが中心となると考えられるため、ヴォイス表現の観察に適しているとは言い難い。ヴォイスを観察するのに適した、様々な視点および描き方が可能な課題設定であることが望ましい。

以上のことから、上級になっても解消されない日本語のヴォイス表現の困難点を明らかにするには「複数のヴォイス表現を対象とする」、「日本語母語話者の使用状況と比較する」、「ヴォイスの観察にふさわしい課題設定のデータを分析対象とする」の3点が必要であると考えられるが、これら全てを満たす先行研究は管見の限りでは見当たらない²。そこで、本研究では、様々な視点が現れる課題設定により、日本語母語話者と中国語母語話者が同一テーマで産出した比較可能なデータを対象とする。また、受身、ナル、テモラウといった複数のヴォイス表現の使用実態を観察することを通して中国語母語話者にとっての日本語のヴォイス表現の困難点を明らかにする。

3. 調査について

3.1 調査対象データ

調査には日本語教育のためのタスク別書き言葉コーパス（金澤編 2014）のタスク6（市民病院閉鎖反対を訴えるための新聞投書）を使用した。本コーパスは、横浜国立大学に在籍する日本語母語話者、韓国語母語話者、中国語母語話者それぞれ30名を対象に、12のタスクによる書き言葉の資料、計1080編を集めたものである。12のタスクは、日常で起こり得る様々な「書く」という活動の中から一定の場面を選んで抽出されている。対象としたデータは、本コーパスのタスク6の日本語母語話者30名、中国語母語話者30名、計60編の書き言葉データである。本データを選んだ理由は3点ある。1点目は日本語母語話者と日本語学習者に同一の課題を課しており、文法項目の使用状況の比較が可能

2 杉村（2013）はこれらの条件全てを満たすものであるが、多肢選択式のアンケートであるため、示された項目以外を選択する可能性については不明である。

であるからである。2点目は、タスク6は市民病院閉鎖反対を訴えるための新聞投書という性格上、様々な視点（私（書き手）、家族、病院、医師、国（市）、住民、読者等）があらわれるため、ヴォイスの使用状況を観察するのに適していると判断したからである。3点目は、本コーパスで対象としている日本語学習者は、日本の大学および大学院に在籍している留学生であり、上級の日本語学習者と言えるためである³。

3.2 調査対象としたヴォイス表現

先行研究における日本語のヴォイスの定義はある程度一致していると見て良いが、具体的にどの項目をヴォイスに含めるかについてはいくつかの立場がある。例えば寺村（1982）ではヴォイスを「補語の格と相関関係にある述語の形態の体系」と定義し、文法的な「態」（受動、可能、自発、使役）と語彙的な「態」（自動詞、他動詞の対立）があるとしている。野田（1991）は自他もヴォイスに含めるという点においてその考え方を受け継ぐが、寺村（1982）における語彙的な「態」（自動詞、他動詞の対立）を「中間的なヴォイス」と呼び、「殺す—死ぬ」のように語根を共有しないものを「語彙的なヴォイス」と呼んだ点で異なる。さらに早津（2000）では、これらの基本的なヴォイスに加え、行為の授受（～テモラウ等）や「～テアル」にはヴォイス的な性質が認められるとしており、視点の対立も周辺的なヴォイスに含めている。

本研究の目的は中国語母語話者が日本語で表現する際に、どこに視点を置いてどのように表現する傾向があるのかを探ることである。したがって、本稿では、野田（1991）の文法的なヴォイス（受身、使役）、中間的なヴォイス（語根を共有するもの（自動詞、他動詞））、語彙的なヴォイス（語根を共有しないもの（例：使役的語彙「殺す」、受身的語彙「死ぬ」等））、視点の対立という点でヴォイス的と言えるテモラウを対象とする。

4. 調査結果

4.1 タスク6におけるヴォイス表現使用の全体像

タスク6における中国語母語話者と日本語母語話者のヴォイス表現の使用状況を表1に示す⁴。

表1 タスク6におけるヴォイス表現の使用状況⁵

	受身	使役	ナル	スル	自動詞	他動詞	テモラウ	受身的	使役的
C	28	7	48	5	24	44	20	6	7
J	60	4	44	8	42	34	9	5	2

表1に示した使用数から分かることは3点ある。1点目は受身表現の使用数は、中国語母語話者は日本語母語話者の半数程度であること、2点目はナル表現は両者の使用数がほぼ同数であること、3

3 日本語教育のためのタスク別書き言葉コーパスで対象としている日本語学習者の日本語力は、JLPTの受験結果およびSPOTの点数で測定している。中国語母語話者30名中26名がN1を取得済みであり、かつSPOTの平均点が61.3点であるため、上級レベルであると言える。なおSPOTの詳細については、<http://bbtj-tsukuba.org/index.html>を参照されたい。

4 Cは中国語母語話者、Jは日本語母語話者を表す。また、「受身的」は受身的語彙を、「使役的」は使役的語彙を表す。

5 ナルには「お世話になる」等、スルには「耳にする」等の慣用表現を含む。また、自動詞/他動詞は、自他の対応があるものを対象とした。例えば「(意見が)あがる/(意見を)あげる」は対象としたが、「食べる」「書く」等の無対他動詞(或いは無対自動詞)は対象外とした。

点目はテモラウを中国語母語話者は日本語母語話者の2倍程度使用していることである。中国語母語話者の受身表現の使用数が少ないということは、受身表現を使用せずに能動形で表していることが考えられる。また、ナル表現はほぼ同数であるが、それらは質的にも同じなのであろうか。さらに、中国語母語話者が日本語母語話者に比してテモラウを多用している背景には何らかの理由があるはずである。そこで本稿では以下の3点を研究課題として取り上げることとする。

研究課題1: 中国語母語話者は受身表現のかわりに能動表現で表すことが多いのか?

研究課題2: 日本語母語話者と中国語母語話者のナル表現の使用数はほぼ同数であるが、質的にも同じか?

研究課題3: 中国語母語話者がテモラウを多用している理由は何か?

4.2 受身表現

まず中国語母語話者が使用した受身表現28例について観察すると、明らかに不自然であると判断されるものは以下の2例である⁶。なお、例文に付された記号(例: C008)は日本語教育のためのタスク別書き言葉コーパスにおけるデータ番号であり、Cは中国語母語話者、Jは日本語母語話者であることを示す。

- (1) この病院が閉鎖されたら、市民の病患が受けにくくなり、付近の病院にも圧力を与えることは確定されています。(C008)
- (2) もし病院が閉じられたら、ここの住民たちの医療に影響してしまうのです。(C043)

このうち(2)は、「閉鎖されたら」のように、「閉じる」を「閉鎖する」に置き換えれば適切であるため、語彙が不適切なことにより生じた不自然さであると考えられる。このように、ヴォイス表現においては語彙が不適切なために文全体の自然さが下がる例が見られることから、受身表現において使用された語彙に注目して分析していく必要があると考えられる。

次に受身表現で使用されている語彙を観察してみる。受身表現が2例以上使われた語彙を表2に示す。上位2語彙は中国語母語話者、日本語母語話者ともに共通している。

表2 受身表現で2例以上使用された動詞

中国語母語話者		日本語母語話者	
閉鎖される	8	閉鎖される	20
検討される	3	検討される	13
廃止される	2	存続される	2
あげられる	2	置かれる	2
		問われる	2

- (3) ところがその市民病院が閉鎖されてしまうという。(J001)
- (4) もし病院が閉鎖されれば、老人や怪我人達のリハビリはまずできなくなる。(C059)

6 ヴォイス表現は視点や語彙の選び方によって文の自然さに差が生じるが、誤用の判定は容易ではない。したがって、本稿では当該文法形式の使用が非文と認められる場合のみを誤用とみなし、それ以外は文の自然さへの言及にとどめる。なお、文の自然さの判定は、執筆者の判断によるものである。

- (5) 私たちの町の市民総合病院が、経営難のため閉鎖が検討されています。(J016)
- (6) 私の住んでいる町ではある市民総合病院を閉じることが検討されています。(C043)

最も多く使われている「閉鎖される」は、日本語母語話者は30名中20名が使用しているが、中国語母語話者は30名中8名しか使用していない。つまり「閉鎖される」を使用しなかった日本語母語話者は10名、中国語母語話者は22名いることになるが、同じタスクであるからには、何らかの形で「閉鎖される」ことを表しているはずである。では「閉鎖される」を使用しなかった者は、それに相当する内容をどのように表しているのだろうか。全てのデータに目を通し、「閉鎖される」ことについて述べている文脈で使われた表現を語彙別に整理した結果を表3に示す。

表3 「病院の閉鎖」をどのように表しているか (語彙別)

語彙	形式	C	J
閉鎖 を 使用	閉鎖される (動詞受身形)	8	20
	閉鎖する (動詞能動形)	9	11
	閉鎖させる (動詞使役形)	1	0
	閉鎖になる (名詞+ナル)	1	1
	病院の閉鎖 (名詞)	7	31
その他	閉める (他動詞)	13	0
	閉まる (自動詞)	1	0
	その他の語彙 ⁷	27	0
合計		67	63

表3から分かることは2点ある。1点目は、日本語母語話者は病院が閉鎖されることについては、「閉鎖」以外の語彙を使用していないという点である。中国語母語話者は「閉鎖(する)」を使用しているのは67例中26例(38.8%)である。それ以外には他動詞(「閉める」)が13例、自動詞「閉まる」が1例、その他の表し方が27例ある。一方、日本語母語話者は63例全てを「閉鎖する」のように動詞として、あるいは「病院の閉鎖」のように名詞として使用している(=(7))⁸。

- (7) 市民総合病院は閉鎖の危機にある。(J022)

2点目は、中国語母語話者のみならず日本語母語話者も能動形を使用して「閉鎖」を表している点である。先行研究においても、中国語母語話者は受身を使用すべきところを能動形で表す傾向があるという指摘が見られ(望月2009, 曹2011等)、確かに中国語母語話者は「閉鎖する」(9例)や「閉める」(13例)といった能動形で合計22例使用している。一方、日本語母語話者が能動形を使用していないわけではなく、「閉鎖する」と能動形で表している例が11例見られる。このように、日本語母語話者も「閉鎖する」という能動形を使用しているのであるが、投書文のどの位置で能動形を使用するかには違いが見られる。中国語母語話者は、投書の冒頭でも能動形を使用することがある(=(8))

7 その他の語彙とは「中止される」、「経営を停止する」、「倒産する」、「廃止する」等である。

8 なお、中国語母語話者にも「閉鎖」という名詞を使用した例が7例ほど見られたが、この7例はC049とC058の2名(上位群)による限られた使用である。(例:横浜市〇〇区の峰沢総合病院は現在閉鎖の危機を迎えている。(C049))

のに対し、日本語母語話者は冒頭では受身形を使用する傾向にあり、文中で再度閉鎖のことにふれる際に能動形を使用する(=9)傾向が見られる。

(8) 【冒頭で】最近この〇〇市の市民総合病院が閉鎖する予定であることを聞いて、(C008)

(9) 【冒頭で】市民病院の閉鎖が検討されているという旨の記事があったが

【文中で】それなのに、市民病院を閉鎖してしまったらどうなるのだろうか。

(いずれも J013)

これは、文の冒頭で必ず受身表現を使用するというのではなく、情報を伝える際に重要となるはじめの段落では、その文章において中心的な話題となるものを主語として置く傾向があるということである⁹。テキストの種類によっても、どの部分で何に視点を置くのが適切かは異なると思われるが、視点の選び方が文章の自然さにかかわっていると言えるだろう。

4.3 ナル表現

ナル表現は日本語母語話者 44 例、中国語母語話者 48 例とほぼ同数である。ただ、使用数が同程度であったとしても、それらがどのように使われているのかを確認する必要がある。まず、両者のナル表現を文型別に整理した結果を表 4 に示す。文型別にナル表現の使用を観察すると、ほとんどの文型における使用傾向は類似している。異なるのは、「イ形容詞／ナ形容詞＋ナル」は中国語母語話者のほうが多いこと、「動詞＋ナクナル」は日本語母語話者のほうが多いこと、「義務表現＋ナル」は日本語母語話者にのみ見られるという 3 点である。

表 4 ナル表現 文型別

文 型	C	J
a. イ形容詞＋ナル	7	3
b. ナ形容詞＋ナル	8	5
c. 名詞　＋ナル	19	14
d. 動詞　＋コトニナル	9	6
e. 動詞　＋ヨウニナル	1	1
f. 動詞　＋ナクナル	4	9
g. 義務表現＋ナル	0	6
合　　計	48	44

中国語母語話者のナル表現 48 例を具体的にみると、48 例中、確実に誤用と判定されるものは、語彙を変えたとしてもナル表現が非文と判定される (10) のみである。その他に不自然であると判定されるものは 6 例 (=11)-(13) あるが、これらは不自然ではあるものの、視点や語彙の選び方が不適切な例であり、誤用とは言い難い。

9 ただし、「閉鎖する」を自動詞・他動詞のどちらとして使用するかには違いが見られる。「閉鎖する」は基本的には他動詞であり、日本語母語話者は 11 例中 9 例を「～を閉鎖する」という他動詞として使用している。一方、中国語母語話者は 9 例中 5 例を他動詞として、4 例を自動詞（「～が閉鎖する」）として使用している。

- (10) 病院がその妊婦を受けとらないので、赤ちゃんが窒息死になる (⇒窒息死する／窒息死に至る) ケースまでも発生しました。(C008)
- (11) もし、市民病院がないと、この辺の居民がすぐ困りになります (⇒困ることになります)。(C026)
- (12) 貴社に手紙を出したのは、〇〇の市民病院が閉鎖になる (⇒閉鎖される) という件です。(C005)
- (13) 高齢化社会になって (⇒高齢化 (社会) が進んで) いく日本はもっとお年よりたちが住みやすい町を作っていかなければいけないのではなかろう。(C039)

これらは「そのような状況に至る」ということを表すために、既知の語彙をナル表現と組み合わせで使用したことがうかがえる。つまり、前節で観察した受身表現と同様に、使用された語彙の特徴を確認する必要がある。

ここで、ナル表現を語彙に注目して整理してみる。まずナルとともに使用された語彙の述べ語数と異なり語数を見ると、日本語母語話者は述べ語数 44、異なり語数 41 であり、ナルと組み合わせて使用する語彙のバリエーションが多いことが分かる。一方、中国語母語話者は、述べ語数 48、異なり語数 35 であるため、特定の語彙と組み合わせて使用している可能性がある。では具体的にどのような語彙とともに使用されているのだろうか。ナル表現で 2 例以上使われた語彙を表 5 に示す。

表 5 から、日本語母語話者が 2 例以上使用しているのは、「お世話になる」という慣用表現および「～なければいけなくなる」という義務表現と組み合わせて使用するパターンであることが分かる。一方、中国語母語話者は「不便になる」を 8 例、「状況になる」を 4 例使用している。

表 5 ナル表現で 2 例以上使われた語彙

中国語母語話者		日本語母語話者	
述べ語数 48, 異なり語数 35		述べ語数 44, 異なり語数 41	
不便になる	8	お世話になる	3
状況になる	4	通わなければいけなくなる	2
少なくなる	2		
問題になる	2		
閉院になる	2		

- (14) 特にお年寄りと体が不自由の人は、病院に行くのはもっと不便になります。(C022)
- (15) 先日の会議で横浜市民病院は、経営困難でもう閉院する状況になると議論したのですが、(C013)

「不便になる」というコロケーションは、日本語母語話者は 1 例も使用していない。しかし同じタスクを実施しているからには、何らかの形で「不便になる」ことを表しているはずである。では、日本語母語話者は「不便になる」という内容をどのように表しているのであろうか。データを観察すると、日本語母語話者は「不便になる」ことを表すために、「義務表現+ナル」、「否定+ナル」、「動詞+コトニナル」等、より複雑な組み合わせのナル表現を使用していることが分かる。

- (16) 電車を使って病院に通わなければいけなくなってしまうのだろうか。(J002)
- (17) 今後は〇〇町の病院へ片道2時間かけて行かなければならないことになるのです。(J009)
- (18) リハビリに通えなくなるような住民も出てきてしまいます。(J018)
- (19) その閉鎖によって大勢の市民や近隣住民が負担を背負うことになる。(J027)

初級でまず学習するナル表現は、「イ形容詞／ナ形容詞／名詞＋ナル」である。これらを【基本のナル】と考えた場合、【基本のナル】の使用割合(表4のa-c)は中国語母語話者は48例中34例(70.8%)、日本語母語話者は44例中22例(50%)であった。つまり、中国語母語話者は日本語の習熟度が上がっても【基本のナル】を多用していることがうかがえる。

4.4 テモラウ

テモラウは中国語母語話者20例、日本語母語話者9例と、中国語母語話者のほうが2倍程度多く使用している。本節では、まず中国語母語話者が使用した20例の詳細を観察し、次に日本語母語話者があまりテモラウを使用しない要因を探る。

まず中国語母語話者が使用した20例を観察すると、不自然な例はあるものの、誤用と言える例は見当たらない。そこで、これまでと同様に語彙に注目して分析を行う。テモラウと共に使用された語彙の述べ語数、異なり語数を観察すると、中国語母語話者は述べ語数20のうち異なり語数は19、日本語母語話者は述べ語数9のうち異なり語数は8と、両者ともに様々な語彙にテモラウを接続させていることが分かる。ただ、使用された動詞を観察すると、ある傾向が見えてくる。使用された動詞が漢語名詞＋スルか和語動詞かという観点から整理すると、漢語名詞＋スルの使用数はほぼ同数であるものの、使用された動詞全体における使用割合には差が見られる(表6)。

表6 テモラウで使用された語彙の種別

	漢語名詞＋スル	和語動詞 ¹⁰	合計
中国語母語話者	6 (30%)	14 (70%)	20
日本語母語話者	7 (78%)	2 (22%)	9

中国語母語話者はテモラウ20例のうち、30%を漢語名詞＋スルと組み合わせて使用しているのに対し、日本語母語話者は8割近くを漢語名詞＋スルと組み合わせて使用している。さらに、テモラウを文型別に整理し、その文型で使用された動詞における漢語名詞＋スルの数を表7に示す。

表7 テモラウ 文型別 (() 内数字は「漢語名詞＋スル」の使用数)

文型	中国語母語話者	日本語母語話者
a. サセテイタダク	5 (2)	1 (1)
b. テイタダク	7 (1)	4 (4)
c. テイタダケマセンカ	2 (0)	3 (2)
d. テイタダキタイ	1 (0)	0 (0)
e. テモラウ	5 (3)	1 (0)

10 和語動詞には複合動詞を含む。

表7を見ると、テイタダクを使用する文型(a-d)では、中国語母語話者の使用総数15例のうち漢語名詞+スルは3例(20%)であるのに対し、日本語母語話者は使用総数8例のうち漢語名詞+スルは7例(87.5%)である。これには、テイタダクを使用する際に選択する語彙のフォーマル度が関連すると考えられる。日本語母語話者は、テモラウの謙譲語であるテイタダクを使用する際には、よりフォーマル度の高い語彙である漢語名詞+スルを選ぶ傾向があると言える。

次に、日本語母語話者は本タスクにおいてなぜあまりテモラウを使用していないのかという点について考えてみたい。本タスクの中で中国語母語話者がテモラウを使用している文脈のうち、投書の結部における主張(「病院を存続していただきたい」等)に注目して観察すると、日本語母語話者はテモラウではなく、「求める」や「願う」等の動詞を能動形で使用していることが分かる。

(20) 私の意見として、この市民総合病院は、閉鎖せず、現行の診療体制での存続を求めます。
(J003)

(21) 今後も市民総合病院が存続していくことを願うばかりである。(J010)

つまり、日本語母語話者が「求める」「願う」等の働きかけを表すことができる動詞の能動形を使用する部分で、中国語母語話者は既習の語彙にテモラウを付加して表すことがあると言える。

5. まとめと考察

本稿で明らかになったことを3つの研究課題に対応させて示す。

■研究課題1: 中国語母語話者は受身表現のかわりに能動表現で表すことが多いのか?

→中国語母語話者が受身形をあまり使用しないのは、能動形を用いているからであるという点は先行研究の指摘のとおりである。しかし、日本語母語話者が能動形を使用しないわけではない。能動形で表すこと自体が問題なのではなく、文章における位置(冒頭部、終結部等)によって選択される視点に傾向があることが示唆される。また、特定の文脈で使用する語彙は、日本語母語話者にはある程度の傾向が見られるものの、中国語母語話者は表し方に多様なバリエーションがあり、それにより不自然な印象を与えることがある。

■研究課題2: 日本語母語話者と中国語母語話者のナル表現の使用数はほぼ同数であるが、質的にも同じか?

→質的な差は大きい。中国語母語話者は「不便になる」等、初級で学習する【基本のナル】を平易な語彙と組み合わせて使う傾向があるのに対し、日本語母語話者は「義務表現+ナル」や「否定表現+ナル」等、より複雑なナル表現を使用している。

■研究課題3: 中国語母語話者がテモラウを多用している理由は何か?

→中国語母語話者は、日本語母語話者が働きかけを表す「求める」「願う」等の語彙を使用する部分において初級の文型であるテモラウ(テイタダク)を使用する例が見られる。

以上のことから、中国語を母語とする上級日本語学習者のヴォイス表現の指導に還元できる知見として、次の2つのことが示唆される。

1点目は、文章のどの位置で何に視点を置いて語るのが自然かには、一定の傾向が見られるということである。「病院が閉鎖される」という特定の文脈における受身表現の使用状況を観察したところ、

先行研究でも指摘されているとおり、中国語母語話者は受身表現の使用が少なく能動表現の使用が多かった。しかし、日本語母語話者にも能動表現の使用が見られるため、能動表現を選ぶこと自体が問題なのではない。テキストの種類にもよるが、特定の位置で視点の置き方に一定の傾向があり、その結果、受身表現が使われやすいという傾向が出てくると言えるのではないだろうか。

2点目は、表現や語彙の不足を補うためにヴォイス表現を便利なツールとして使用している可能性があるということである。ナル表現では中国語母語話者は上級であっても形容詞+ナル等の【基本のナル】を使用しているのに対し（例「不便になる」）、日本語母語話者はより複雑なナル表現を使用していることが観察された。また、中国語母語話者が日本語母語話者よりテモラウを多く使用する背景には、既習の語彙にテモラウを組み合わせることで、「求める」や「願う」に相当する内容を表そうとする傾向があることが観察された。

6. おわりに

文章における位置は考慮せずに視点を選択すること、不足する表現や語彙の代用として既習文型であるヴォイス表現を使用することは、初級や中級といった発達段階においては、有効なストラテジーの一つであると言える。確かに、庵（2017: 140）が述べるように、規則をシンプルにした100%を目指さない文法を示すべきであるという考え方も、産出を促すためには重要である。しかし、上級になって、より自然な日本語を運用できるようになりたいというニーズがある場合には、そのニーズに応えられるようにしておくべきではないだろうか。今後は、本稿で得られた知見をもとにさらに調査を進め、中国語を母語とする上級の日本語学習者が日本語のヴォイス表現を適切に運用できるようになるための情報を蓄積したい。

参考文献

- 庵功雄（2017）「産出のための文法～「100%を目指さない文法」の重要性～」『一步進んだ日本語文法の教え方』1, くろしお出版, pp. 138-141
- 植松容子（2019）「中国語母語話者は日本語のヴォイスをどのように表すか—受身表現とナル表現を中心に」2019年日本語の誤用及び第二言語習得研究国際シンポジウム発表資料（2019年11月9日, 北京人民大学）
- 金澤裕之（編）嵐洋子, 植松容子, 奥野由紀子, 金庭久美子, 金蘭美, 西川朋美, 橋本直幸（2014）『日本語教育のためのタスク別書き言葉コーパス』ひつじ書房
- 胡君平（2016）「台湾人学習者による日本語使役文の用法別の使用実態—LARP at SCU の分析結果から—」『日本語教育』163号, pp. 95-102
- 杉村泰（2013）「中国語話者における日本語の有対動詞の自動詞・他動詞・受身の選択について—一人為的事態の場合—」『日本語／日本語教育研究』第4号, pp. 21-38
- 曹娜（2011）「中国語を母語とする中上級日本語学習者の受身形の使用状況—書き言葉コーパスにおける誤用と回避に注目して—」『学校教育学研究論集』第23号, pp. 55-65
- 寺村秀夫（1982）『日本語のシンタクスと意味I』くろしお出版
- 野田尚史（1991）「文法的なヴォイスと語彙的なヴォイスの関係」仁田義雄編『日本語のヴォイスと他動性』くろしお出版, pp. 211-232
- 早津恵美子（2000）「現代日本語のヴォイスをめぐる」『日本語学 四月臨時増刊号』Vol. 19-5, pp. 16-27
- 望月圭子（2009）「中国語を母語とする上級日本語学習者によるヴォイスの誤用分析—中国語との対照から—」『東京外国語大学論集』78号, pp. 85-106
- 渡邊亜子（1995）「中国語母語話者の日本語受身文の使用実態とその背景—母語との対照からの仮説設定—」『言語文化と日本語教育』9号, pp. 216-228
（うえまつ ようこ 日本語日本文学科）